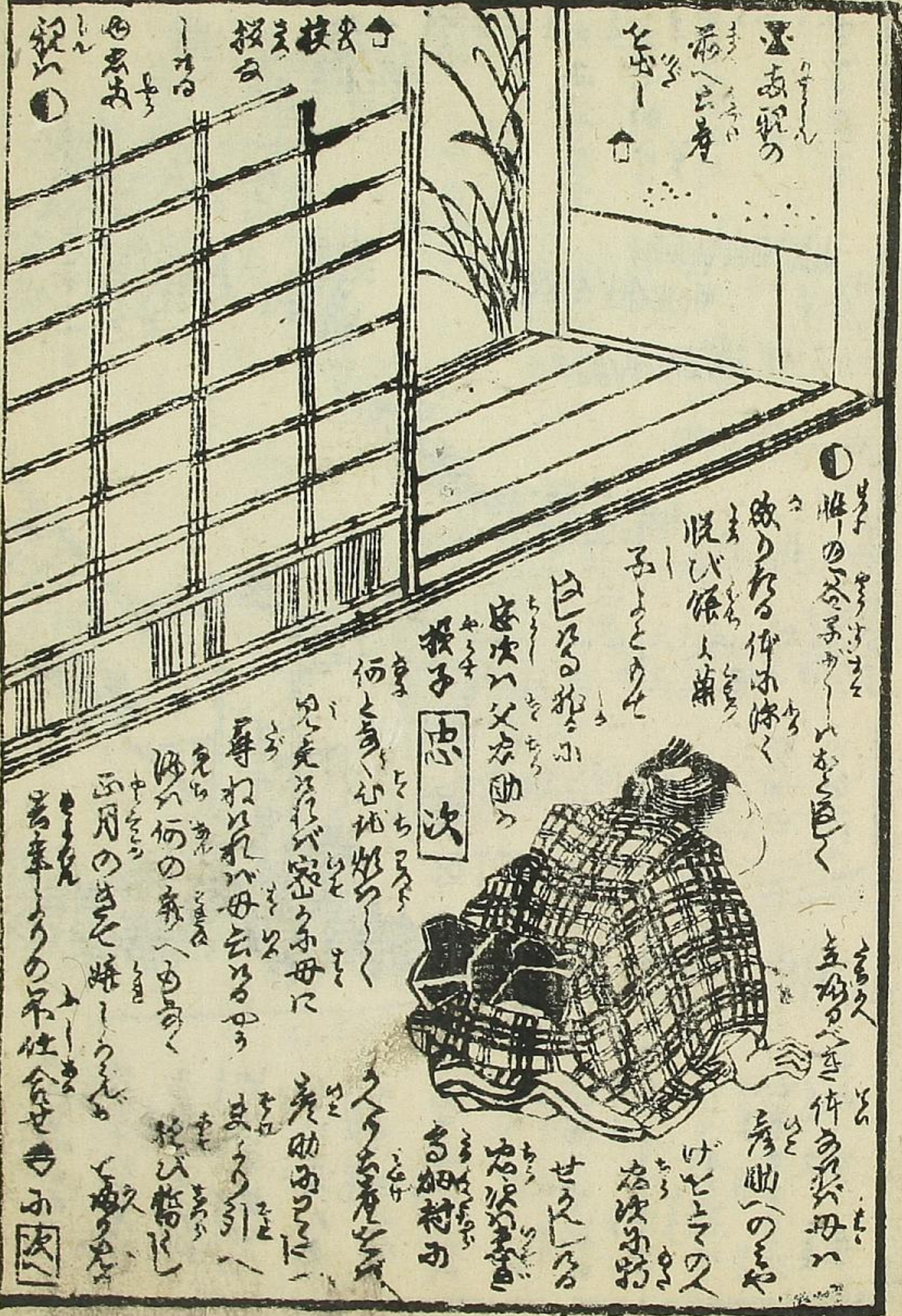


大西庄之助 編
嘉永 水戸
國定 忠治 實傳 初編 上卷





窓の外の
 景色は
 静か
 である

何となく心細い
 感じがする
 母は
 静かに
 座す

母の心は
 静かに
 座す
 母の心は
 静かに
 座す



母の心は
 静かに
 座す

母の心は
 静かに
 座す

母の心は
 静かに
 座す

可憐被金を札の引出し小強し金かきどりの金せ
 持聖日又假面一尋小強し以用の金とり入る由
 又そ夫持刺子て假面か余と成り候
 此ら金限りて次の持刺と云
 社舞の金限りて村お尋りて内の
 侍と云ふ事あるの事す故に侍
 進こ入り母お尋りて何れ又
 河原と云ふ田舎
 子やういふ事
 云いかく
 金の事
 お出の事
 中次



可憐被金を札の引出し小強し金かきどりの金せ
 持聖日又假面一尋小強し以用の金とり入る由
 又そ夫持刺子て假面か余と成り候
 此ら金限りて次の持刺と云
 社舞の金限りて村お尋りて内の
 侍と云ふ事あるの事す故に侍
 進こ入り母お尋りて何れ又
 河原と云ふ田舎
 子やういふ事
 云いかく
 金の事
 お出の事
 中次

可憐被金を札の引出し小強し金かきどりの金せ
 持聖日又假面一尋小強し以用の金とり入る由
 又そ夫持刺子て假面か余と成り候
 此ら金限りて次の持刺と云
 社舞の金限りて村お尋りて内の
 侍と云ふ事あるの事す故に侍
 進こ入り母お尋りて何れ又
 河原と云ふ田舎
 子やういふ事
 云いかく
 金の事
 お出の事
 中次



可憐被金を札の引出し小強し金かきどりの金せ
 持聖日又假面一尋小強し以用の金とり入る由
 又そ夫持刺子て假面か余と成り候
 此ら金限りて次の持刺と云
 社舞の金限りて村お尋りて内の
 侍と云ふ事あるの事す故に侍
 進こ入り母お尋りて何れ又
 河原と云ふ田舎
 子やういふ事
 云いかく
 金の事
 お出の事
 中次

父と母とを花嫁より同いもの女を次次奉仕しつゝ
 生えさへいれあらず他父孫より小遣に二百文あり
 夫れを以て友連と名中双六とにせしめり
 小遣を返す小遣
 夫れを以て夫より
 人小遣の生傍を道指ら
 たりと傳言をたまへ
 此まかぬ親等とせしめ
 夫れに初めなるうらな
 眼後との海を
 行ふ舟一と
 夫れを以て先
 小遣を返す

志の十藏
 夫れを以て夫より
 人小遣の生傍を道指ら
 たりと傳言をたまへ
 此まかぬ親等とせしめ
 夫れに初めなるうらな
 眼後との海を
 行ふ舟一と
 夫れを以て先
 小遣を返す

夫れを以て夫より
 人小遣の生傍を道指ら
 たりと傳言をたまへ
 此まかぬ親等とせしめ
 夫れに初めなるうらな
 眼後との海を
 行ふ舟一と
 夫れを以て先
 小遣を返す



夫れを以て夫より
 人小遣の生傍を道指ら
 たりと傳言をたまへ
 此まかぬ親等とせしめ
 夫れに初めなるうらな
 眼後との海を
 行ふ舟一と
 夫れを以て先
 小遣を返す

文字房
 夫れを以て夫より
 人小遣の生傍を道指ら
 たりと傳言をたまへ
 此まかぬ親等とせしめ
 夫れに初めなるうらな
 眼後との海を
 行ふ舟一と
 夫れを以て先
 小遣を返す

夫れを以て夫より
 人小遣の生傍を道指ら
 たりと傳言をたまへ
 此まかぬ親等とせしめ
 夫れに初めなるうらな
 眼後との海を
 行ふ舟一と
 夫れを以て先
 小遣を返す

夫れを以て夫より
 人小遣の生傍を道指ら
 たりと傳言をたまへ
 此まかぬ親等とせしめ
 夫れに初めなるうらな
 眼後との海を
 行ふ舟一と
 夫れを以て先
 小遣を返す



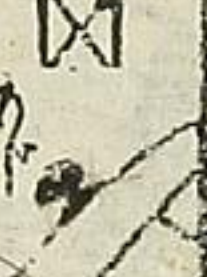
夫れを以て夫より
 人小遣の生傍を道指ら
 たりと傳言をたまへ
 此まかぬ親等とせしめ
 夫れに初めなるうらな
 眼後との海を
 行ふ舟一と
 夫れを以て先
 小遣を返す



長守小太郎



國定忠次



小猿のてんき

あてあがりする内原
昔のうの目早助

夕方小
及次郎乃林勝と

文守
小引

旅人と女
旅人

吉田傳助

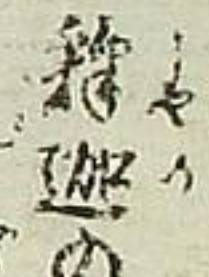
人猿



吉田傳助



國定忠次



小猿のてんき

あてあがりする内原
昔のうの目早助

夕方小
及次郎乃林勝と

文守
小引

旅人と女
旅人

あてあがりする内原
昔のうの目早助

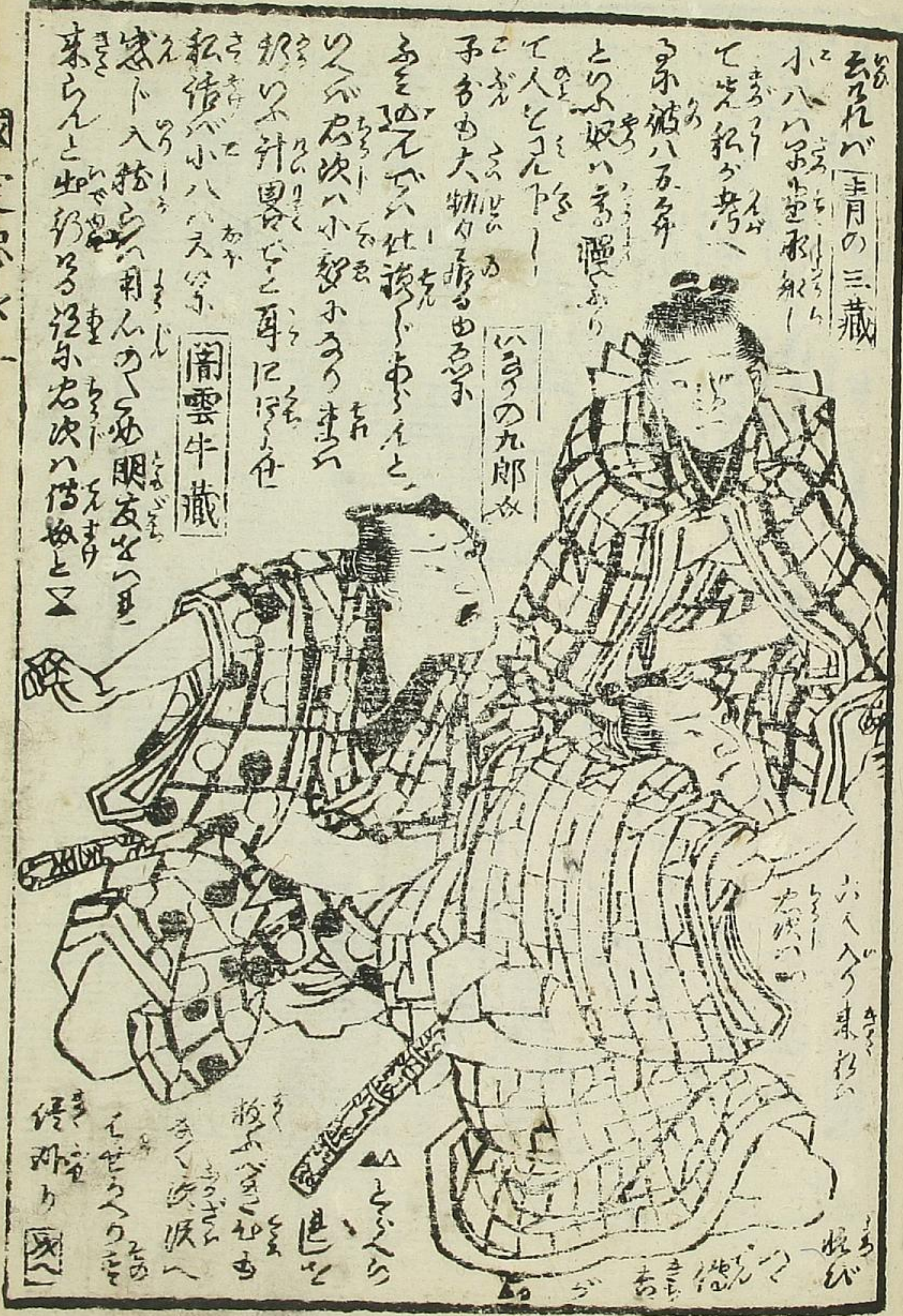
夕方小
及次郎乃林勝と

文守
小引

旅人と女
旅人

吉田傳助

人猿



去るれば五月の三藏
 小八の事も水取
 て先私考
 不波八五年
 との事奴の事
 て人と云下
 子も大物
 ありては
 小八の事
 松平小八の事
 闇雲牛藏
 末らんと
 友をへ
 友をへ
 友をへ

六人入る
 大八の事
 小八の事
 松平小八の事
 闇雲牛藏
 末らんと
 友をへ
 友をへ
 友をへ



小猿の傳吉
 國定忠次
 小八の事
 松平小八の事
 闇雲牛藏
 末らんと
 友をへ
 友をへ
 友をへ

大の事
 小八の事
 松平小八の事
 闇雲牛藏
 末らんと
 友をへ
 友をへ
 友をへ



國定忠治
初編下

延 延 延
延 延 延
延 延 延
延 延 延



ついでに... 葉の吹さらけ... 園妻又藏

平気常吉

鶴目早助

おび大令の乳... とまらんやま...

又新... 平世... 葉の吹さらけ... 園妻又藏



園定忠次

いさりの九良助

おび大令の乳... とまらんやま... 園定忠次

依て... 葉の吹さらけ... 園定忠次

一、
 彼友人の無情いふ
 考へて波瀾の香
 大徳の八日...
 子も...
 國定忠次



吉田傳助

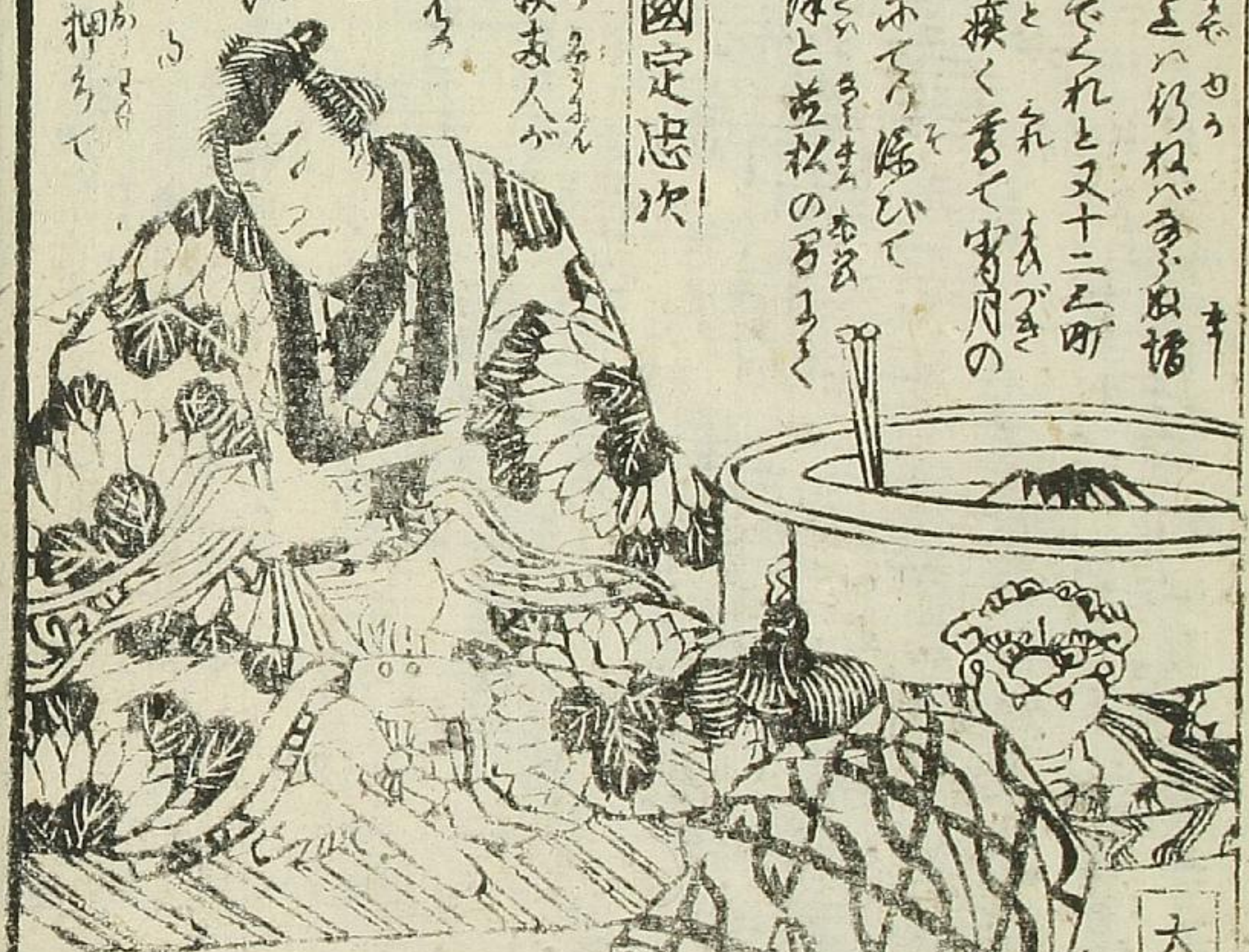
平氣の子藏

青の三藏
 大まき糸
 〇ある月夜に
 八重菊ありて...
 南雲三藏
 大佛小八



相生まはねばさぬ諸
をさうさ意いせられと又十二三町
来じ小田の疾く書て宵月の
茶屋の病みての病ひて
度へ平由 赤原と並松の石より
人甲をた
長煙を
士と赤領友人か
かー小乃ゆえ
どろこ小用と
見えんと赤領
かまひ下り
木下宮茶押多て

國定忠次



大佛小八
今權付の
中なる
小まが
目か
るす
かち放
か
ある日
市女が宅小のうまか
宅小廣うらうらう笑えせ
をて下されと後さる
故市女も困也か
見へやうかよえ

形も物一ま個の曲者個以うて
鶴ろろろおと由云は切付ら切ら
ら由法者の赤領披合せ替へる
物子の除滅小守も弱りたぢろろ
曲者いこころけて切判し
四辺を兄見入る士は何所へ
外の人敷あきさねはるのり
繩切とた合を替へ引控へ
て遊矢り
例の如く増葉小
乃か時將い引つて
の揚利故日夜是小舟へ入身て
揚るさくさくなられは妻のあよみ

小猿の傳吉



鶴目早助
市女
忠次小まが
と加へ
のり
相
れど
は
務の
折さ
折さ
小まが
由小舟へ入

〆〆 彼と
 面樹下金を
 十五六七
 七五加不
 八八掛合
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆



〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆

〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆

〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆



〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆

〆〆 〆〆
 〆〆 〆〆

〆〆 〆〆

一盃の酒を酌み交し
 道辺の侍従警守中
 不出を掃くの雨の向
 虎ぬとの本家の室小主人
 女中の小供有りと
 好む及故持九希由少
 のるに其れんと五人打連
 借虎助者、初めは梅を
 負るるう、お阿利う、是れ
 きつ、由眼とつげ、彼
 取り、手紙と出せ、以、家
 の又

百姓市々
 子面出

忠次妻と
 忠次妻と
 忠次妻と

忠次妻と
 忠次妻と
 忠次妻と

忠次妻と

忠次妻と



〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇



〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇

〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇
 〇 〇 〇 〇 〇 〇

寛政記



武助

さあさあ次小
と身以死せ
飯券状と
うん或は行
後一切
目とさるる
御子次郎の外
のそらう波浪
のそらう波浪
のそらう波浪

金と出上り
金と出上り
金と出上り
金と出上り
金と出上り



武助

武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし

武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし

武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし

武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし
武助のしるし

武助のしるし

ついでに... ○おれも... ちつぎ五穀実の... 未を林... せよ... 世... あり公...

あり公... 故... あり玉... 人... ぬわの



武助... ぬわの... ぬわの... ぬわの... ぬわの...

ぬわの... ぬわの... ぬわの... ぬわの... ぬわの...



ぬわの... ぬわの... ぬわの... ぬわの... ぬわの...

日本書紀卷之二十一

古傍と綴り 相明友の

人々を召寄りてその外

組に村役を授けしむ

村の人を組合百人けり

と振きしむる所の

風俗をのりて

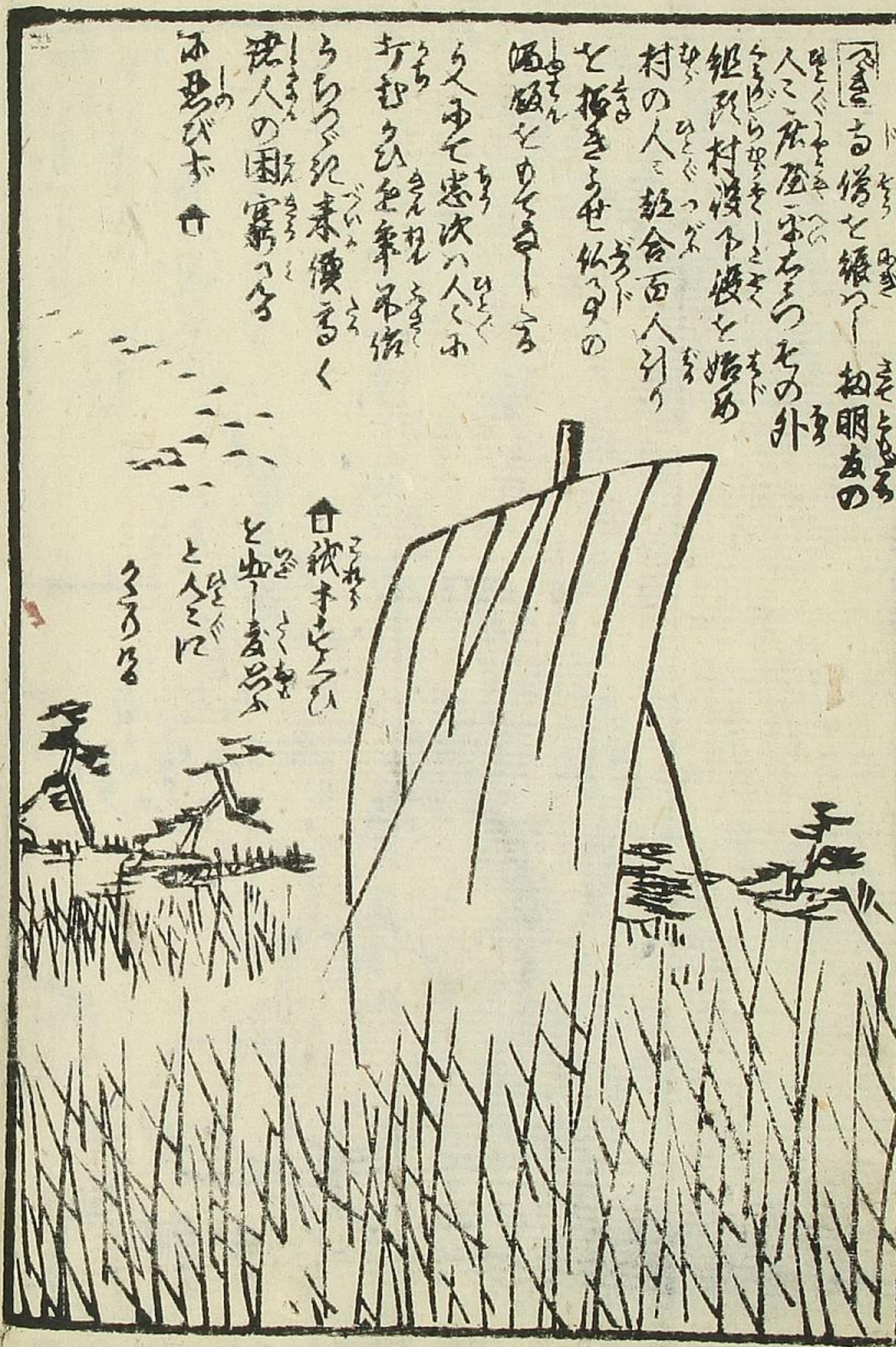
久雨て患次へ人々

打ちを承りしむ

うらむるに未便なる

諸人の困窮なる

不忠びお



白紙手とて
と申すまは
と人々に
まらる

大國 天一坊 語 日 龍 村 伊 賀 之 末 月 五 二 日

大國 越 後 博 吉 日 龍 村 伊 賀 之 末 月 五 二 日

大國 越 後 博 吉 日 龍 村 伊 賀 之 末 月 五 二 日

大國 越 後 博 吉 日 龍 村 伊 賀 之 末 月 五 二 日

大國 越 後 博 吉 日 龍 村 伊 賀 之 末 月 五 二 日

大國 越 後 博 吉 日 龍 村 伊 賀 之 末 月 五 二 日

大國 越 後 博 吉 日 龍 村 伊 賀 之 末 月 五 二 日

大國 越 後 博 吉 日 龍 村 伊 賀 之 末 月 五 二 日

大國 越 後 博 吉 日 龍 村 伊 賀 之 末 月 五 二 日



國正忠良
二編上

延 延 延

延 延 延

延 延 延

嘉永永水辭傳一名國定忠治之傳卷之三

東京

大西庄之助編輯

相も忠次へ支那の伝事と傳へておぼや
 今も忠次はしき川傳のとりまの伝事
 傳死しなりとも傳へべき子に
 何れせん様をそよ由り
 百もなりたる川傳もそよ由り
 上之面もせも九半が一毛身は
 向上げりて秋一もつらふま
 向へ各々様をそよ由り
 包村の奥者を去りて切多と
 引物不き一と云はれは
 入りける赤特の袂はる形も

東京 大西庄之助編輯
 相も忠次へ支那の伝事と傳へておぼや
 今も忠次はしき川傳のとりまの伝事
 傳死しなりとも傳へべき子に
 何れせん様をそよ由り
 百もなりたる川傳もそよ由り
 上之面もせも九半が一毛身は
 向上げりて秋一もつらふま
 向へ各々様をそよ由り
 包村の奥者を去りて切多と
 引物不き一と云はれは
 入りける赤特の袂はる形も

四ノ二

事ありと心と定めぬんとあはれまわりの
あはれ痛く傷く血汐もあまの精のたげ痛く
あはれあはれあまの精のたげと拾ひ故と成る
あはれあはれあまの精のたげと拾ひ故と成る

傳吉

二日余もかゝるつづ三月間小あまの
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る



藏

あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る

あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る

忠次



あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る
あまの精のたげと拾ひ故と成る



あふだ捲れた外内も成らんぬあふだ
 是れ由はかぬ中を痛いとこころ
 止めコリヤ傳者他が
 安小枝物さしき若のふか
 不致をんあつとつ小枝者
 痛あうく修世の大文保一節
 如く親方と入心形は城家形はト
 云ふ忠告はらるる程を合子十有八はト
 前にも致さる程とゆふあてて
 破心神を心するが首指縁にて秋小
 不登るの程の約定の如く

いん
 せと
 のつれ
 て傳者
 あがえ
 考へ
 のつれ
 首を
 前にも
 破心神
 不登る
 の約定
 の如く



止らぬ娘照子
 吉免はと一云
 止らぬ娘照子
 吉免はと一云

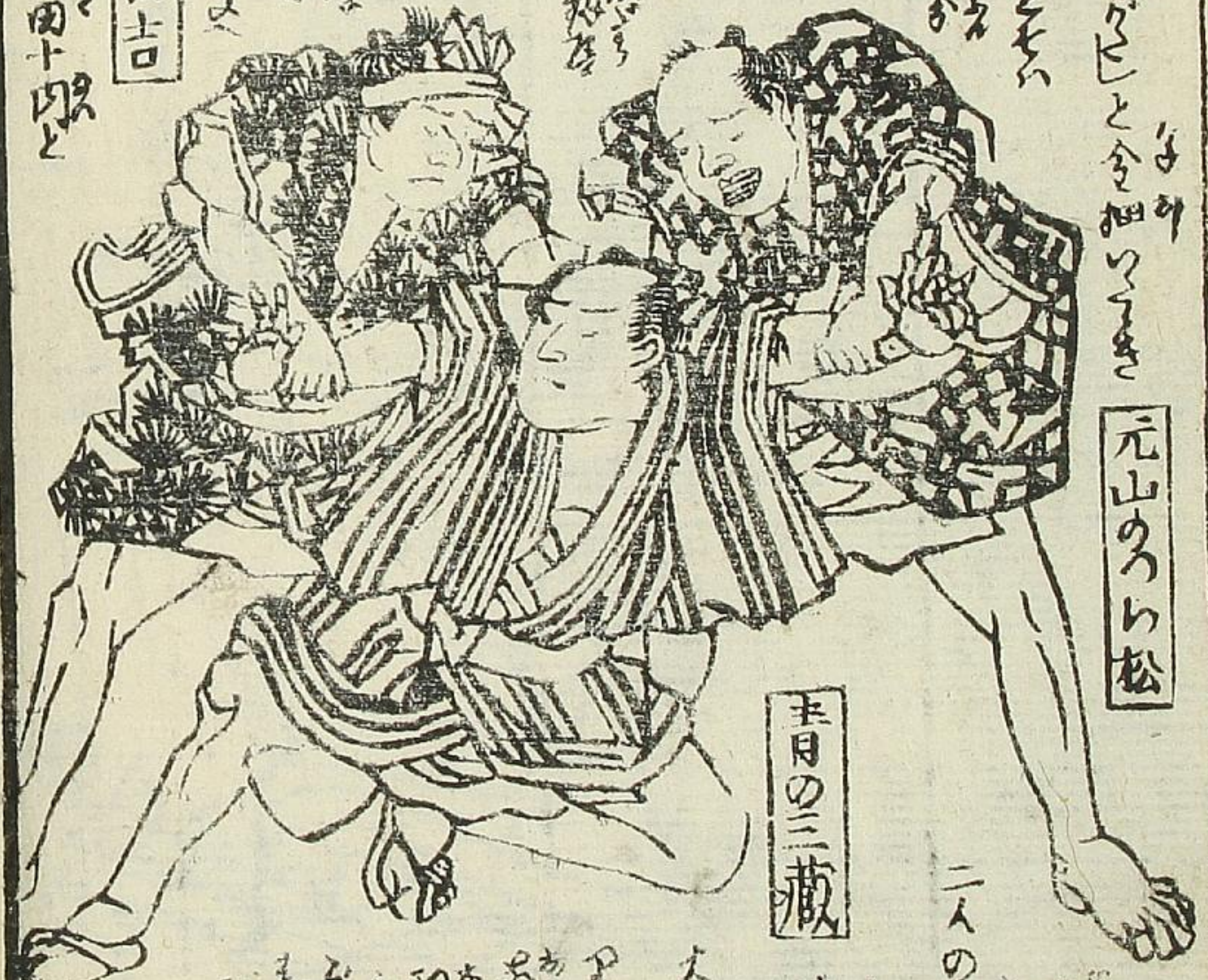
子とよは
 生記を
 保ふ来
 一云
 此は
 伝書

三三三

七

元山のり松

元山のり松の世に三有りと金細りてき
 ありくれば速きなりは家とそい
 主知てなるの度又お次り子
 昔の之藤の月も利あり
 松井田と仍なるやけあふ大
 保一南との浪士ありえ来
 伊丹の舟そはふ舟知
 揚南は浪男が妻と笑ひ
 宇野の舟はかりを船て
 がぬ抱子をまきける世と今
 るくおのの舟をまきける世
 ありける故郷て
 生植松吉
 おが幼かより竹葉はるる木田内と



五月の三藏

二人の若きゆ
 大いなる怒
 松吉の
 元山のり松

元山のり松の世に三有りと金細りてき
 ありくれば速きなりは家とそい
 主知てなるの度又お次り子
 昔の之藤の月も利あり
 松井田と仍なるやけあふ大
 保一南との浪士ありえ来
 伊丹の舟そはふ舟知
 揚南は浪男が妻と笑ひ
 宇野の舟はかりを船て
 がぬ抱子をまきける世と今
 るくおのの舟をまきける世
 ありける故郷て
 生植松吉
 おが幼かより竹葉はるる木田内と

元山のり松の世に三有りと金細りてき
 ありくれば速きなりは家とそい
 主知てなるの度又お次り子
 昔の之藤の月も利あり
 松井田と仍なるやけあふ大
 保一南との浪士ありえ来
 伊丹の舟そはふ舟知
 揚南は浪男が妻と笑ひ
 宇野の舟はかりを船て
 がぬ抱子をまきける世と今
 るくおのの舟をまきける世
 ありける故郷て
 生植松吉
 おが幼かより竹葉はるる木田内と

嘉永
 永
 水
 海
 國
 定
 忠
 治
 實
 傳
 武
 編
 卷



正 延 延

延 延

延 延

三蔵法師の
 下小おきあせし
 容子と原
 小僧の
 一男あひれあうらの有さる侍小

三蔵法師の
 下小おきあせし
 容子と原
 小僧の
 一男あひれあうらの有さる侍小



三蔵法師の
 下小おきあせし
 容子と原
 小僧の
 一男あひれあうらの有さる侍小

音右衛門
 小僧の
 一男あひれあうらの有さる侍小





忠次の 國定忠次

立石工の 首

小猿の傳吉

忠次は長川
の舟子才也
國代の外れり
と云ふ
交軍内亦あり
と云ふ
我父も女
のよあり
と云ふ
小猿の傳吉
のよあり
同左也
と云ふ
委細也
青の三藏

忠次は長川
の舟子才也
國代の外れり
と云ふ
交軍内亦あり
と云ふ
我父も女
のよあり
と云ふ
小猿の傳吉
のよあり
同左也
と云ふ
委細也
青の三藏



忠次の 十藏

忠次は長川
の舟子才也
國代の外れり
と云ふ
交軍内亦あり
と云ふ
我父も女
のよあり
と云ふ
小猿の傳吉
のよあり
同左也
と云ふ
委細也
青の三藏

忠次は長川
の舟子才也
國代の外れり
と云ふ
交軍内亦あり
と云ふ
我父も女
のよあり
と云ふ
小猿の傳吉
のよあり
同左也
と云ふ
委細也
青の三藏



十蔵

これといひたる
放ま六ハ水知
秋家とほして
志次ハ之流を招き

我方あては
のりハ衣次ハ
ゆるハ彼ハ流
五ノ

のち松

了と二人
の老と妻
より後
る



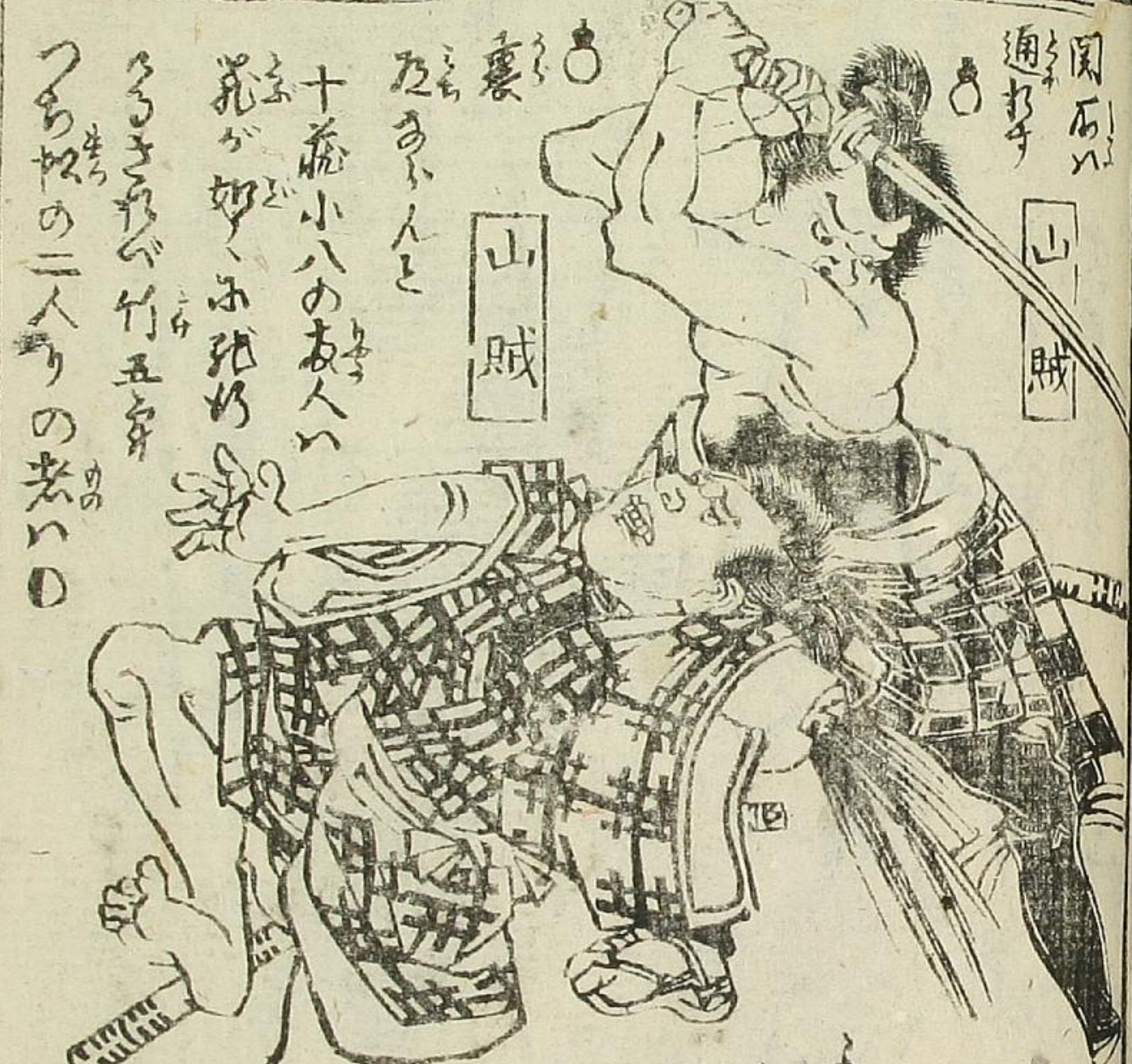
其六ノ家の
今井流の
小ハ

青の
老と
子細
差出
少の

南

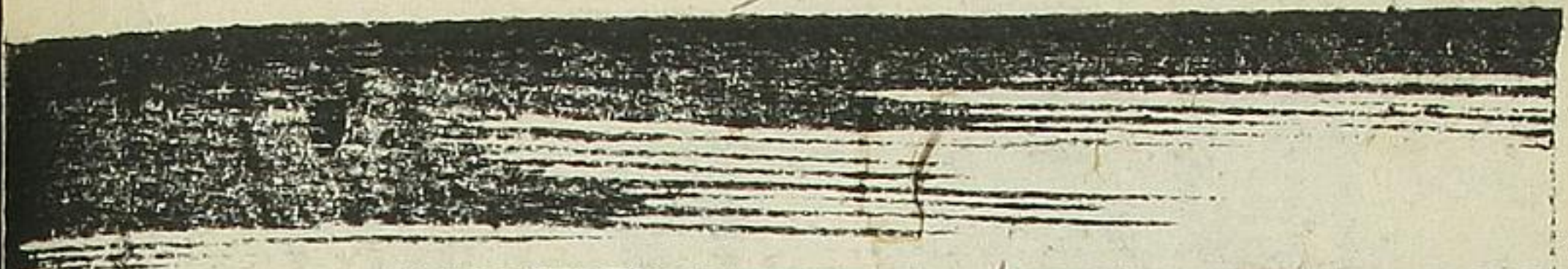
とれ
ま
紙

五郎



十蔵小八の友人ハ
 花が如くお花の
 ころきねが竹五郎
 つらねの二人りの者の
 山賊

のまづりも若て
 團扇の道はす喜た
 うりべーど六七す
 本流は十蔵小八
 とりておもふ二人
 と切例の膳井也
 山賊



竹五郎と小八の友人
 多く人あつたふ分の老とわ
 懐くを忠考のふあ下る一
 休ひ之飛い他りして長
 さねの兄あつた分兵出す
 つと返養はまが酒者
 小八の兄は上令ふ女あ
 十蔵と小八の友人
 小八の友人はよく
 多しお花を横すつ
 小八の友人はよく



山賊
 小八の友人
 小八の友人
 小八の友人

國定忠臣

七

國定忠臣

三

つぎ 初て忠次ハ志願ありて日光へ兼備せんと
天保九年四月廿日 至宜村と出立内一足も
若拙不備り候の事立内宜と成候に候
碑乃放りかや人となん引るを
肝不入るは夜の
昭安く候と申す起出
一因 終るささる死出と云ふ
各々刀を袂に帯りて出立
のさるは疾風のるる所
さることを不承り候と云ふ候
各々刀を袂に帯りて一人の男
教へられ候と云ふ候と云ふ候

音吉



音吉 忠次様
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは

忠次 忠次様
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは



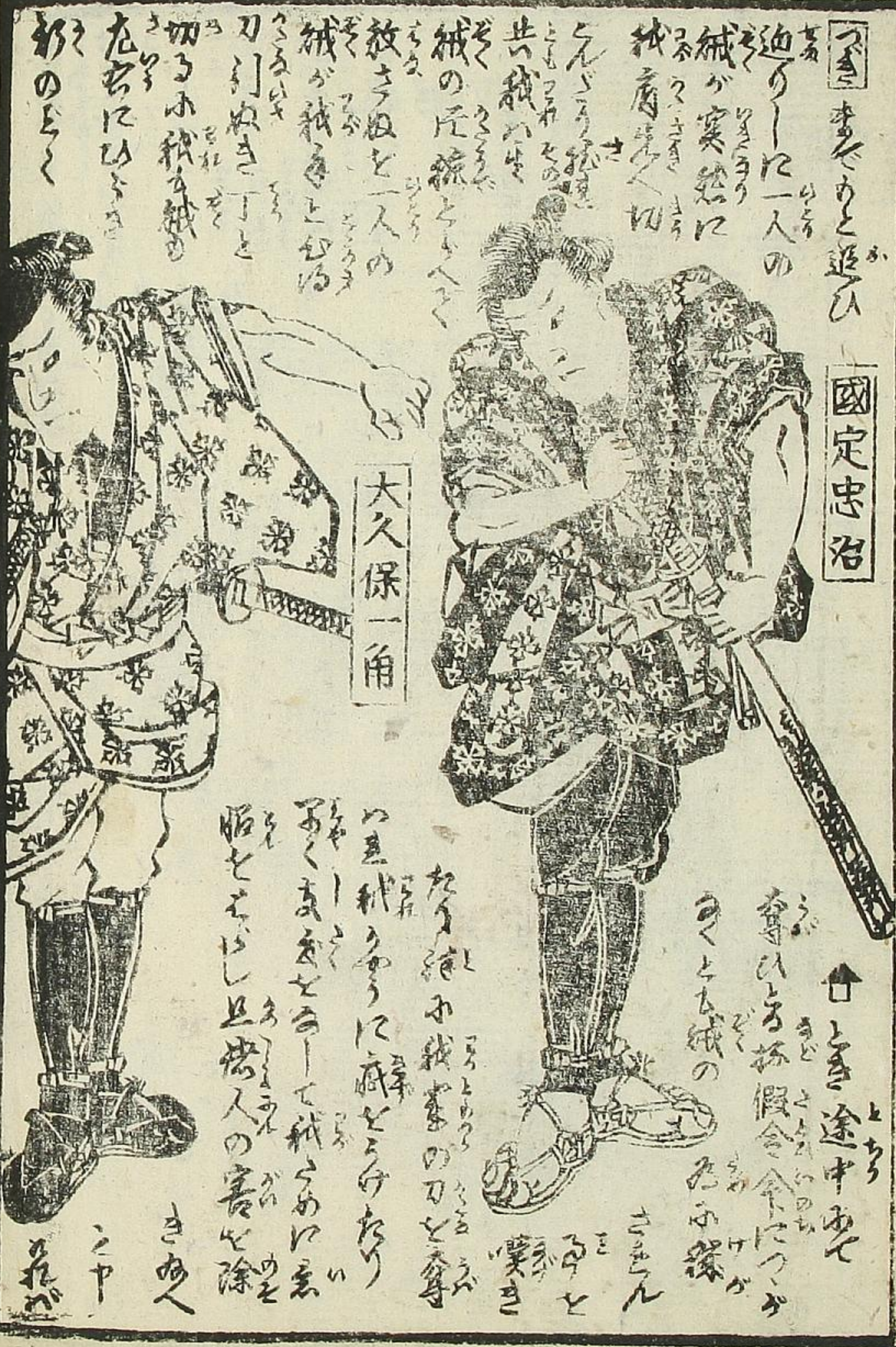
小八

小八 忠次様
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは
おれは

つぎをめぐりて遊ひ

國定忠治

上り途申あて



迫りしに一人の
絨が突然に
絨着せし切

共積ひ生

絨の丘線と入る

放さぬと一人の

絨が絨とむる

刀打ぬき丁と

切す小積を絨の

九右にひと

大久保一角

奪ひ去杯假令余につか
まるとも絨の
たすけ

たすけお我々の刀と奪
ひ去るに絨とむる

たすけお我々の刀と奪
ひ去るに絨とむる

さあ
さあ
さあ



絨の絨を小積り
たり

ひれと疾奔とあひ
絨を絨とむる

絨の絨を小積り
たり

絨の絨を小積り
たり

絨の絨を小積り
たり

絨の絨を小積り
たり

絨の絨を小積り
たり

絨の絨を小積り
たり

絨の絨を小積り
たり

絨の絨を小積り
たり

並川の才女

二人は
絨の絨を小積り
たり

絨の絨を小積り
たり

小ぢり村後の婿替の會

絨の絨を小積り
たり



久保の城の侍家持一れど
田由西山ふさむけは右次一角

二人づつ目おろしを思
盗まされ一子より戻さんと

小八才
小八才の一人

引立
引立
引立



○お由右波の平石
大久保と渡
命守一先
小杉へ至り
住まぬが
家お

才成

生捕らむ一う
お白

白
お由
お由
お由



拾のせき石を...
 一時小火とくけ...
 利素の連也...
 他と打也...
 放城の...
 八人の...
 四り...
 以て...
 丸人...
 多ト...

城の...
 小松...
 親と...
 日...
 幼...
 つれ...



大久保一角

合又...
 多放...
 小怒...
 一...
 乃...
 広...
 の...
 先...
 大...

大久保一角

○松由大次保一南へ髪結まぬ小
 一回と起一縁のよふとととの
 花の井
 小次郎村小浦りるに
 次小次郎そそりて
 湯年の早敷るて
 新渡のどり河合
 村の水深
 ちて高村の
 利平は

盗と出—て侍とくくする
 密次主人
 小次郎と喜以ま
 湯年の早敷るて
 新渡のどり河合
 村の水深
 ちて高村の
 利平は



▲松島左門
 ▲隣村の月代へ捕り
 色儀情のゆたきて
 軍とるり河合村の村と
 ちて高村の
 利平は

死せて酒多のをむむ
 小次郎と喜以ま
 湯年の早敷るて
 新渡のどり河合
 村の水深
 ちて高村の
 利平は



松島左門



上編三治忠定國

延 延 延

延 延 延

延 延 延

東京 大西庄之助 編輯

幼て去次い相傳左門が如く、もて後、
 ぬれいとなきま、正定村へ移りて、
 公定に傳りたる子の名を、まの政村に
 稱する。是時、去次い、九条助平の、
 由一、ふあ、の、と、と、と、
 中何の、ま、ま、と、
 養て、ま、ま、
 手紙の、ま、ま、
 の、ま、ま、
 風情の、ま、ま、
 先生、ま、ま、

又、
 一人、
 小、
 屯、
 又、
 り、
 向、
 去、
 取、
 地、
 此、

國定忠治傳

方お供は心と
中へ一様と代と
めちりせりた
方者由取知
若川へともする
叔父ははへ一甫と
お供は心と代と
若川へともする
叔父ははへ一甫と
お供は心と代と
若川へともする
叔父ははへ一甫と



もしやあめ小八
と海に上へるも
けりて殺す
ト小八
もしやあめ小八
と海に上へるも
けりて殺す
ト小八

彼も久保一引
若川へともする
叔父ははへ一甫と
お供は心と代と
若川へともする
叔父ははへ一甫と



四郎助
もしやあめ小八
と海に上へるも
けりて殺す
ト小八

國定忠治三十一

ついでに密なるに相補らばと全射

岩久保の山平一運

廿日後

建策

なる

く

なる

なる

なる

なる

なる

なる

なる

なる

区は遊み及ぶる故一角

獲るに九多故に

青の三藏

石川六右衛門

○山中の人数とあはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ



三飛

三飛

三飛

三飛

三飛

三飛

三飛

三飛

三飛

三飛

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ



あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

是より山崎とて先づの家業をせんとあつた

多可山崎とて又先づと執とて其は「ホ」とて棟梁と

其のの残り多しとて「若くして」成りゆる者其は

あつた手すてははさるべしとて

彼とも返さるれとのふしとての者

ははは力多しとて先づも有内船とて控

あつたといふに一角むも上回といふ

廿七人聖徳のふりつり

二百七十余人とてはし

よりり六十二人

のりり一角

とて



女房

〇〇〇〇〇〇五人

〇〇〇〇〇〇〇〇

ハ秋とて
とてとてと
〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者

あつたはもまといの者



勇造

久保子左門那去米とて
名苗帯乃丸丸の
喜家あり

〇〇〇〇

天保十五年十月月令の事小の村中
 結まざる別み出せしめるその夜西
 比城二人思ひ入つて彼用人を奪ひゆくと
 志す下人の依まき同と見えし声とまろり
 主人の城抜打小依まくと切創すけおる

忠治
 一れ共おぼえ
 ひこゆへ城と
 判する者
 由る内
 美のこに
 てお新やお

城の内
 小の村中
 結まざる
 別み出せ
 しめるそ
 の夜西
 比城二人
 思ひ入つ
 て彼用人
 を奪ひゆ
 くと
 志す下人
 の依まき
 同と見え
 し声とま
 ろり
 主人の城
 抜打小依
 まくと切
 創すけお
 る

城の内
 小の村中
 結まざる
 別み出せ
 しめるそ
 の夜西
 比城二人
 思ひ入つ
 て彼用人
 を奪ひゆ
 くと
 志す下人
 の依まき
 同と見え
 し声とま
 ろり
 主人の城
 抜打小依
 まくと切
 創すけお
 る



出は
 門外
 下人作兵工
 下人作兵工
 下人作兵工
 下人作兵工

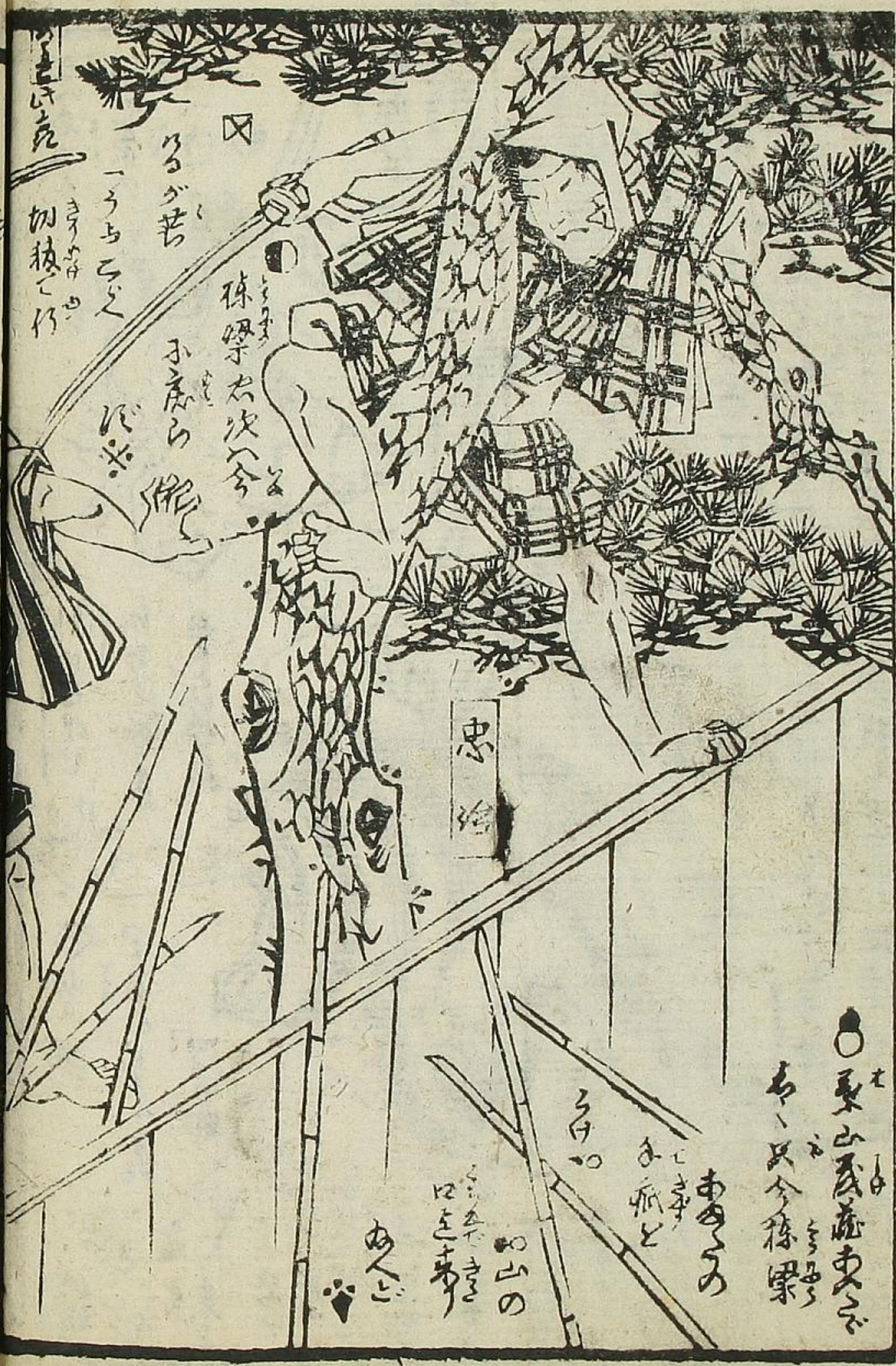
でん吉
 大城云酒を
 てのこりき
 今小城ハ大の村中
 結まざる別み出せしめるその夜西
 比城二人思ひ入つて彼用人を奪ひゆくと
 志す下人の依まき同と見えし声とまろり
 主人の城抜打小依まくと切創すけおる

出は
 門外
 下人作兵工
 下人作兵工
 下人作兵工
 下人作兵工

でん吉
 大城云酒を
 てのこりき
 今小城ハ大の村中
 結まざる別み出せしめるその夜西
 比城二人思ひ入つて彼用人を奪ひゆくと
 志す下人の依まき同と見えし声とまろり
 主人の城抜打小依まくと切創すけおる



出は
 門外
 下人作兵工
 下人作兵工
 下人作兵工
 下人作兵工



○栗山茂盛
あ、只今孫栗

あつちの
あつち
あつち

あつちの
あつち

あつち

孫栗茂盛
あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

傳吉

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

成三郎

女房

松

成三郎は
女房の
松は
忠次
源八
茂藏



如何はしてのれらるるを
男造妻なるは七月二日
此の田上は不揃いされ
和ふ入多習うて秋来服
去て徳右次郎とあるを
存るは一向なること

小八

茂藏

源八



つきのふく 飢饉ふぬけ

中世公義よりか救ひとあり
下民と極貧はあんど老角
よま
世の中あちちあちち

一角

あてもない
人々救

ひま
先づ
先づ

年々
とんととんととせりとたぬ何はに

刀掛子や生機ふ刀掛世に

のまへに取付るはあちちあちち

とてゆえんともあちちあちち

大いなるあちちあちちあちち

左所あちちあちちあちち

右次あちちあちちあちち

さあちちあちちあちちあちち

ううううあちちあちちあちち

はさき刀自強と彼一は紙運命あちち

あちちあちちあちちあちち

あせせあちちあちちあちち



我主人を討てて去るの故に
重く代り亦た其の責を負ふ
何れも
忠治



水取にやト只に在る女小八と云ふ
一境取引にやト又右次ハ大の
其まより所とせむとせむとせむと傾け

我一人の命を以てして
是より向後無事なる事
吾人とするを恨み子とす



九月十日十二月
の果せしむに
おけいおと
速におん
依りおん
直におん
おのくけい
とておん

九郎助



何れも十九人のうちを皆一団に
廣くおん
秋は雨ありては山時と遅くなりと秋ハ大
重なるおん

稲藏

人もある
おん
おん
おん

大正庄之奴編
嘉永水
水許
國定
忠治
實傳
三編
下尾

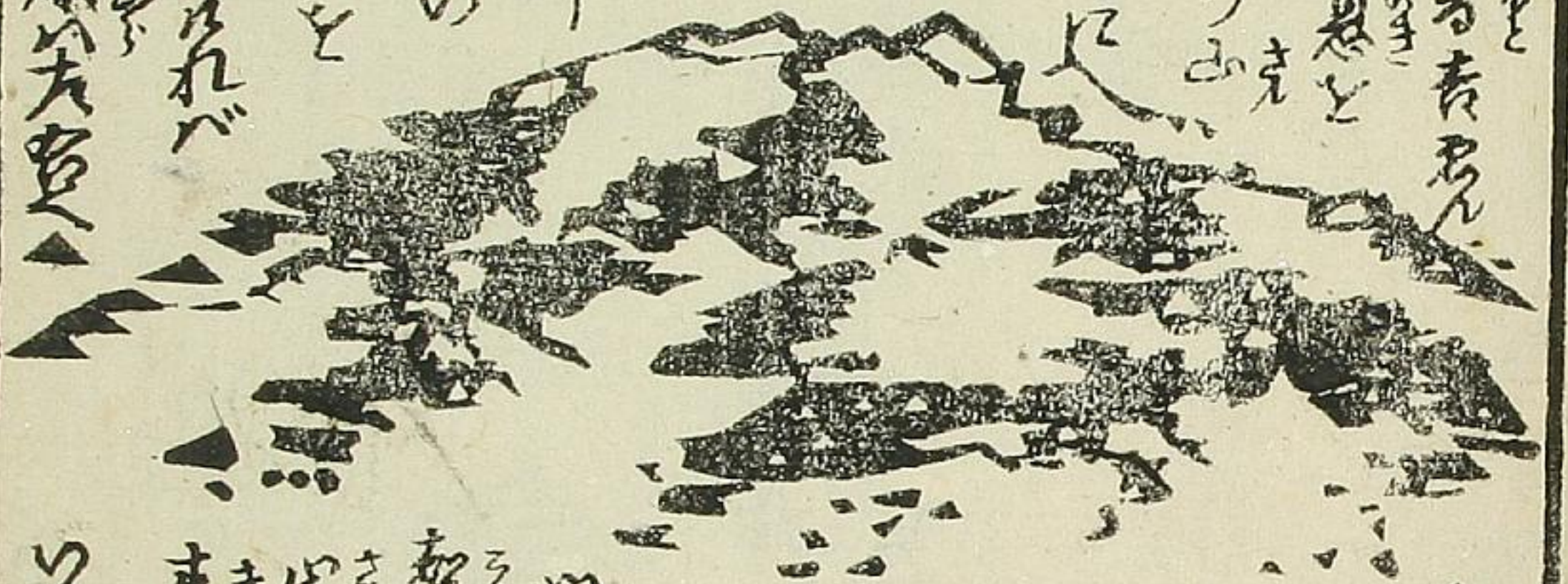


正 延 延

正 延 延

延 延 延

○再脱鉄砲の善者おん
 まのま幣場の息と
 限りみうけまの
 隙の門前小舟に
 門と切見張の
 去由辰の平山へ
 と返ゆるを扱ふ
 友人の犬の小屋
 と先玄徳の門の
 扉小なとみかど
 拾めて押初らしれば
 丹の中より柄麻の夫



開けられぬ友人内へ
 今ふ人ま入由か
 されば不守者ま
 由之れて子に返
 と娘めまう人
 産一乃れ友人の
 去採一を採と
 同いとまるに右次ハ
 初めけ去捨場ハ区
 い誰中えまりか今
 まりしり又善者のま
 りふせると弟あふ善者ハ

○去採
 名者
 人そ右捕
 らはと
 のまを
 素ト次

方々を巡るとまじりて
板屋宿 音吉

あつた和満
お命よひに

多き
同縁

あつたま
よりゆと

香あふに
隣住あふと

去る天保七
申年六月廿二日の夜



引継ぎの正し
と解き骨とせむ
いそぎ
と賣り

お次ハ
四ノ

と

と

と

江指

女中者お七

と頼一もに付る

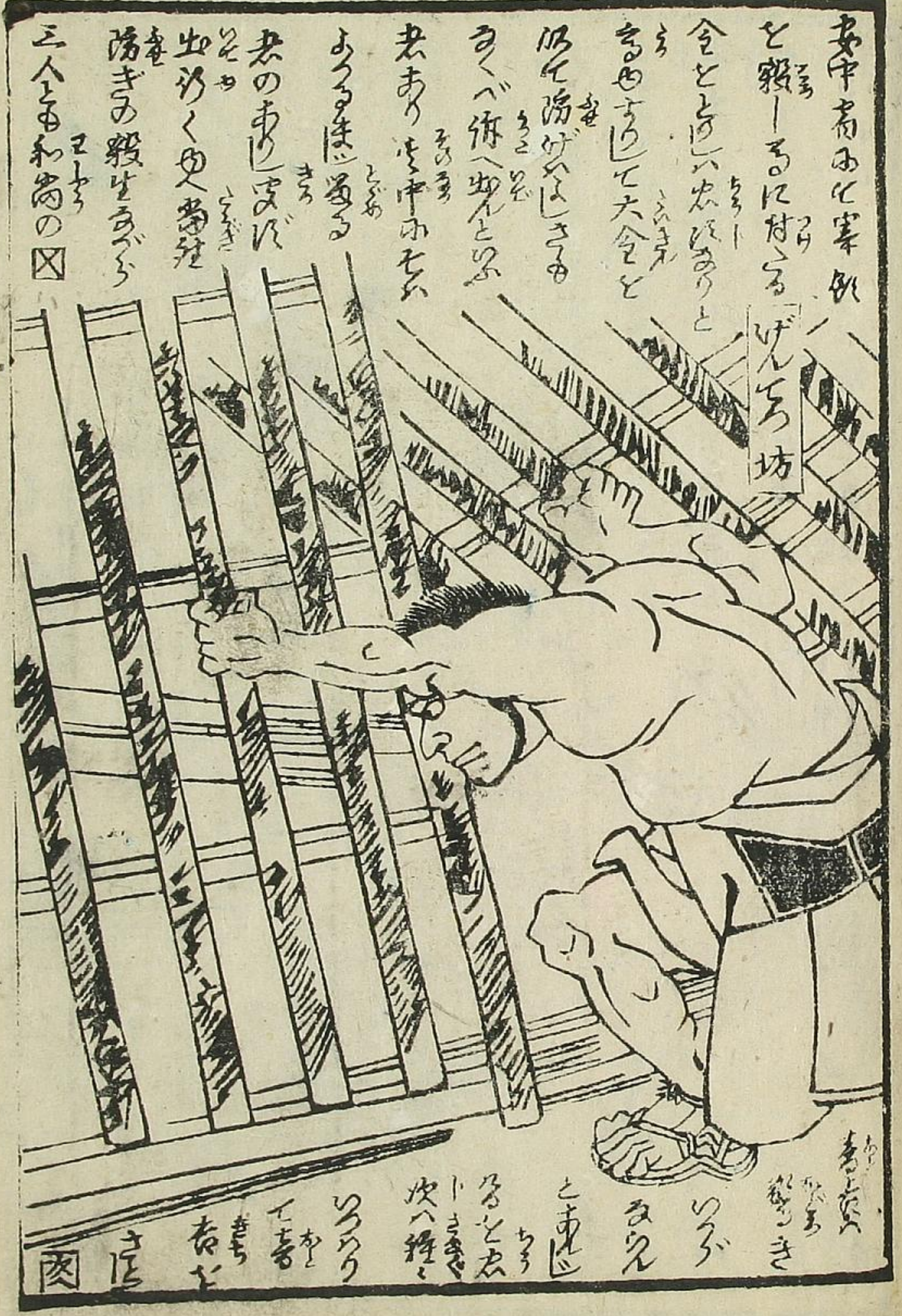
金ととりハ

あつた

あつた

お七の

三人とも和満の



お七

お七

お七

お七

お七

お七



せういん
 振へ盗
 まの先
 せういん
 教年の
 と委
 年四十九才
 月刻不
 不令武
 とまの
 行町安
 赤心と

音吉

何の
 今
 志
 同



忠治
 入ての
 め
 入ての
 め
 入ての
 め

父
 家
 業
 名
 と
 稱
 一
 先
 祖
 の
 家
 名
 と
 稱
 一

今
 先
 祖
 の
 家
 名
 と
 稱
 一
 先
 祖
 の
 家
 名
 と
 稱
 一

三つ止め

相勇遣小用

多ありと別

君へ極き何やらん

女付とつら

勇遣小用

怒り終ら

おとひ

用ひぬ

しを

しを

しを



忠治

おとひとつら女付とつら
勇遣小用
怒り終ら
おとひ
用ひぬ
しを

丑松



石松

小次郎

下りり

女前あさ

のあ

一通

各合

中し

と後

他人

を

あ

平六

金平

次へ

方身中し母りゆ以一十ある
 ありる故伊あゝの事と見
 て大いお驚る子重役更
 け出返一先下通る左傳
 勇造田あふへの上あめ
 出伏め及右生外と
 逐一不記一ゆり
 幼定身仍へ中
 達一にお敵りる友
 不主い前武所始
 く不い武所始
 久保あてる捕不
 お敵小孩の傳者



千二百五余の金と
 盗り取らぬ様
 手子取さ
 敵討進去りたる紙
 いおたお遠返と
 用はあり
 りとほ傳者と自出
 白洲へ引去るれ
 西き伏の修せたる
 あハコロバ傳者ゆ始
 久保身 右門取人
 方へ押入る
 日影と白



將進の十番のあ
 城をあて守る也
 忠次
 右の中不傳者
 若久保より
 送る所の
 出伏



合く同石
 著傳の甲の突お
 出さめとありる又
 あ人取捕の者
 伏せ伏せ
 伏せ伏せ
 拵杖とれと

大いお驚かされりし初めは此目より
 借者と申す大工の事には申されは
 新長は誓久保するの城を以て
 内は至極せむらるれば方々々々
 申す申す之れは余の
 事如何なる事
 ありとも一切おしや
 さいと笑はるるは
 一衣十千の依を
 取穿ししけられ
 惣小今を勇造が術



長を
 百人の
 同心五
 ありと

小の村の十番と申すは
 旧来のありしれども是の同
 由伏せはぬなりさの困り
 先づ十番も軍回へ
 其れ相ひ小旗り捕
 の及へぬはれりしと申
 の上は方々おはせりし
 と傳せしきるゆへに申上り
 王へ通達ありしれは
 是も申す事ありしは
 捕方出張は是れ知れり
 申す久保へ出張ありし人
 成敗あるの内長保と申す



乃れは申す
 是の事
 人数と
 勇造
 大保
 の四
 ありと

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三



○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

○ 定忠法三

御 届
明治十五年 編纂
月 日 小 松島町一番地
大田庄之助

Vertical columns of text, likely a list or index, written in blue ink. The text is organized into several columns, with some characters appearing to be names or titles. The ink is faded and the paper is aged.

